

星のない夜

町田市立忠生第三小学校 五年 小林^{こばやし}宗太^{そうた}

今日も朝早くからいそがしそうに大人たちは、満員電車に乗りこみそれぞれの仕事へ行く。

ある人は、家族を養うためだったり、ある人は、生きていくためだったり。そして、完全に日がのぼると今度は、子どもたちが家から学校へ向かう。

子どもたちにとっては学校がある意味仕事なのだ。

そんな朝の様子を1人の男が家のまどからながめながらつぶやいた。

「ランドセルってカラフルな星みたいだな。」

その男の家はともごうかで庭もとても広く大きな木が何本も生えていた。

家の中も部屋がいくつもあある。

友人たちを家に招くと必ずみんなうらやましがるような家である。

ある日、男の家に友人が遊びに来ていた。

「ひまな時は、どうにもここに来たくなる。お前の家は、居心地が良いからな。」と友人がソファアでくつろぎながら言う。

「そうかなあ。昼間はだいたい家にいるからいつでも遊びに来てくれ。」と男も友人と一緒にくつろぎながら言う。

「それにしても何でこんな良い家に住めるんだ？夜に仕事に行ってるんだろ？どんな仕事してるんだ？」友人がたずねる。

「夜のけいび員みたいな仕事だよ。」

「それだけで？こんなにかせげるのか？」と友人が半信半ぎのような顔で聞いてくる。

「オレもけっこうがんばってるんだよ！休みも少ないしさ。」と男は笑って答える。

「そういうもんなのか？」と友人も笑う。

「ああ。ただオレの運がいいだけかもな。」

そんな話をしながら昼をすごし、友人が帰ると仕事の時間まで仮みんをとる。

実は、男は夜のけいび員などしていない。

この世で数人しか知る人がいない仕事を男は先祖代々やっている。その一族の一人なのだ。外がうす暗くなり始める。

市長賞
小林宗太「星のない夜」

男は、目を覚ましまどから外をながめながら言う。

「今日もそろそろやるかな。」

男は、家のおくにある部屋に入る。

部屋の中で作業着に着がえ、部屋のまん中にある円ばんのようなものに乗れり、ボタンを押して、レバーを引く。

ゆっくり天まどが開き、どこからか光る物体がいくつも出てきた。

そして、男の乗った円ばんはどんどんと空に向かって飛んでいき、雲まで来たところで止まった。

男は空にたれ下がる、細い糸のようなものを手に取り、円ばんから光るものをとり出し、その糸につけた。

無数にたれ下がる糸に順番を確にんしながらいくつもの光るものをつけていく。

「はあ。いつもよりつかれる。きのうは、カンボジアたんのやつが熱を出して、オレが代わりにカンボジアまで仕事に出たから、寝不足なんだよな。」

そう言い、目をこすりながら円ばんから持参したコーヒーを出して、雲を指で一すくいしコーヒーに入れて一服する。

「さて、もうひとふんばりやるか。」

と言つて男は、光るものを両手いっぱいにかかえ、糸につけようとしたが、両手にかかえすぎていて、バランスをくずし大量に光るものを落としてしまった。

「ああ！どうしたものか！」

と男はあわてたが、もうどうすることもできない。男はあきらめた顔をして

「報告書を出さなきゃな。まあきのうは、カンボジアの代わりもやったしこのことは、ボスも大目に見てくれるだろう。」

辺りが明るくなると男は、ボタンを押しレバーをもどす。

円ばんは、ゆっくりと下がっていきそのまま男の家のおくの部屋に着地した。

次の日、男がテレビを見てみると気になることがニュースでやっていた。

「昨夜は、すごく流れ星が見えましたね。

何かの流星群だったのでしょか。」

「はい。あれは、気象の関係でまれに起こるかなりめずらしい現象でしてね50年に1度くらいに起きる現象で……」

市長賞
小林宗太「星のない夜」

天文学者のような人物が解説をしていた。

「ああ。きのうオレが落とした星のことか。」と男はつぶやき、この「夜空星付職人」の仕事も大変だな。こんな仕事があるなんてだれも考えないだろうな。と思いつながら今日もまどの外をながめていた。

審査員講評

細かい設定の一つ一つにしっかりとこだわりの感じ、そのおかげで物語の世界観がグッとリアルに感じられました。最後に漢字にカタカナの読み方をつけているところも素敵でした。

—— KEN THE 390